

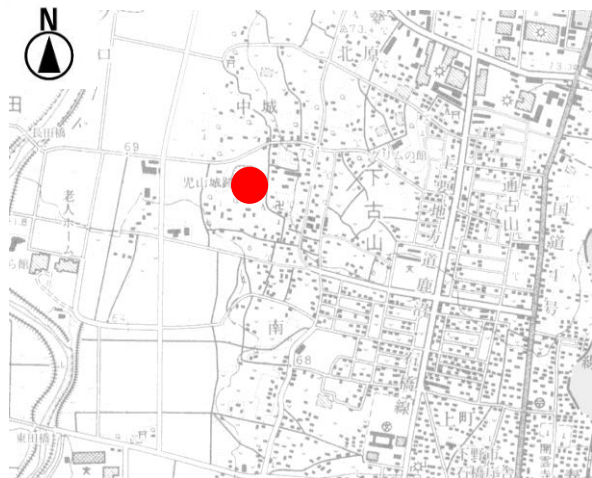
# こやまじょうあと 児山城跡の発掘調査

—範囲内容確認調査—

## 【児山城跡の概要】

児山城跡は、姿川東岸の台地端部に所在しています。自然の地形を巧みに利用した平城で、鎌倉時代の後期(西暦1,300年前後)に多功城(上三川町)主、多功宗朝の次男朝定により築城されたと伝えられます。城の遺構は本丸を中心に良く遺されており、本丸の堀と土塁はほぼ全周し、規模は東西約80m、南北約90mで、土塁の四隅は他に比べ高くなっており、櫓があった可能性があります。また、本丸周辺にも部分的に堀や土塁が残されていることから、児山城が複郭であったことがわかります。城の規模は、これまでに発掘調査等が実施されていないことから不明ですが、地名として本城、西城、中城、北城、稲荷城等が残されていることから、かなりの規模をもつ城郭であったと考えられます。

※栃木県指定史跡(昭和36年5月6日指定)



## 【発掘調査の概要】

これまで、調査が行われていないことから今年度は、基礎的な調査データを得るための調査方法として、堀の深さの確認、土塁などの構築物の状況、本丸内の遺構確認面までの深さ、遺存状況の確認などを目的としました。

調査の結果、本丸の堀は逆台形の箱堀と呼ばれる形状で、底面の幅は約11m、現在、残存している土塁上面から堀の底までは約7mあります。堀の上面の幅は約20mであることも確認されました。堀は一定の期間さらわれることなく、自然に埋没しており、その後土塁の一部が破壊され、その崩落土により一部が埋まった状況であることが確認されました。

合戦時に使用する拳(こぶし)大の礫(れき)「石つぶて」は、堀底から多く出土したことから廃城の際に投棄されたのではなく、城が機能していた時点＝合戦の際に使用されたとも考えられますが、児山方のものか敵方のものかは分かりません。

本丸内の館や建物があったと想定される範囲では、現地表面の約50cm下で硬化した面が確認されました。一部に焼土や炭化物が確認できることから建物そのものが焼けたのではなく、使える部材を撤去した後に残材を焼却した可能性が高いと考えられます。



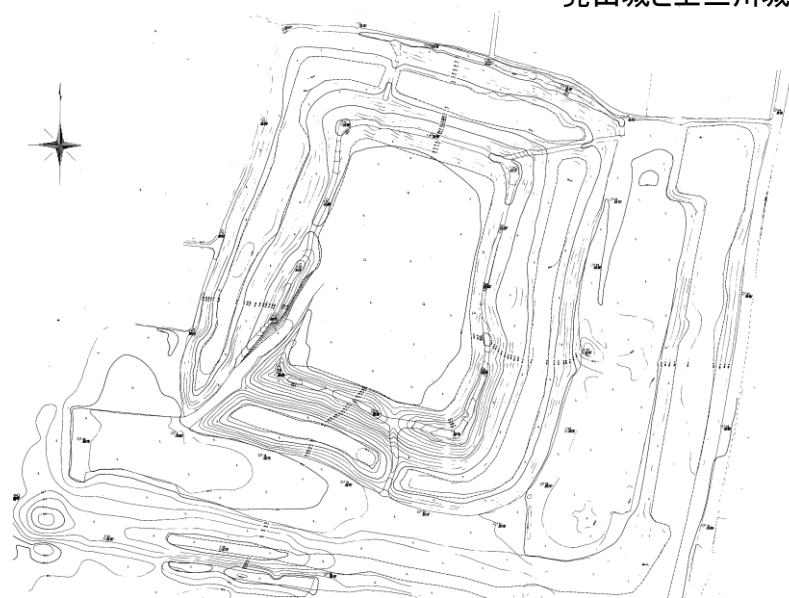
土塁の断面



堀の断面

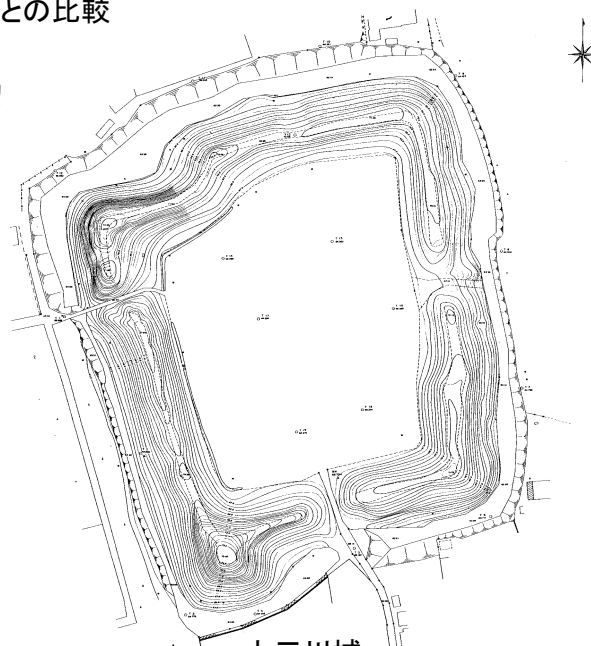


### 児山城と上三川城との比較



児山城跡

※本丸規模東西約80m×南北約90m

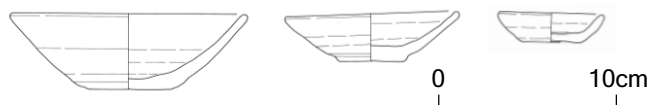


上三川城

※本丸規模東西約90m×南北約100m

### 【堀から出土した遺物】

宇都宮一族系の飛山城Ⅱ中段階、上三川城(大町遺跡2号溝B地点)、石那田館出土のものと形状や大きさが類似することから15世紀末～16世紀前半頃のものと考えられます。



出土遺物実測図

### ○参考文献

- ・栃木県教育委員会 1982 『栃木県の中世城館跡』
- ・今平利幸 2001 「下野における中世土師器皿について」 『栃木県考古学会誌』第22集

児山城跡発掘調査現地説明会資料 (2017.3.5)  
編集・発行 下野市教育委員会生涯学習文化課  
〒329-0492 栃木県下野市笹原26

TEL 0285-32-8919

E-mail syougaigakusyubunka@city.shimotsuke.lg.jp

